

病院図書室マニュアル

編集の思い出

浜口 恵子

(高槻赤十字病院図書室)

「マニュアルの編集委員になってくれませんか」その一言が私の苦しみ(?)の始まりだった。経験の浅い私にはとても無理だと思い、一度は断わったものの、おだてに乗せられてつい引き受けてしまった。しかし、その自分の軽率さをすぐに後悔することになったのは言うまでもない。考えてみれば、図書室の多岐に互る仕事を一冊の本に収めるという作業を一から計画して実行していくのだから、若い私には荷が重すぎた。

早速編集委員長の勤務先である国立京都病院に通う日々が始まった。来る日も来る日もより良い本を作るための討論が重ねられた。「京都への定期券を買わないといけないわね」という冗談が、まるっきりの冗談ではないような忙しさであった。

作業は遅々として進まず、本当に本が完成する日が来るのかどうか半信半疑であったので、2年後やっと出来上がった時にはやり遂げたという思いより、出来上がったのが信じられないという気持ちの方が強かったように思う。出来上がった本を手にした時は、2年間の皆んなの苦労を思い、感無量であった。

今から思えば、長かったようで短かった2年間であるが、1冊の本を作り上げた病図協のエネルギーはやはり大変なものであったと思う。もちろん、周りの方々の温かい励ましやご協力あつてのことであるが、「本を作る」という今までに経験のないことを、全くの素人が力を合わせて成し遂げたのであるから、そのパワーは賞賛に値するのではないだろうか。

私もわずかな期間ではあるが、一緒に作業をし、病図協を動かしているこの目に見えない「パワー」に触れて、ここまで病図協が発展してきた理由が理解できたような気がした。

今年、設立15周年という1つの節目を迎えたが、一会員として病図協の今後のますますの発展を祈ってやまない。

大学図書館が参加して

織田 忍

(明治鍼灸大学図書館)

昭和53年4月、今の大学の前身である鍼灸医学を専門とする三年制の短大が日本で初めて誕生しました。新しく開学したばかりの短大図書館、私にとっても新しい職場、右も左もわかりません。

その頃、営業でお見えになった医学書専門店「厚生社」の伏谷、上林さんより近畿病院図書室協議会の存在を教えていただきました。そんな経緯で加盟させていただいた他の図書館との初めてのつながり、その後協議会の皆様には実に多くのことを教えていただき、困った時には助けていただきました。

事務局より送付される各種の案内等読ませていただきながらも、研修会などにはなかなか参加できず残念に思っています。しかし、研修会のテーマは実務の中で生じるその時々の問題に添っており、また会報や会誌の発行、アンケート形式の統計調査、雑誌総目録の発行など役員の方々、会員の皆様の活発な活動ぶりにいつも感心いたしております。さまざまな事業の中でも、特に文献相互貸借については依頼があるとまず病図協の目録を使って所在を確認し、とても重宝しています。

本学も、この丹波日吉町で短大が開学してから早くも12年が過ぎようとしています。昭和58年4月に四年制大学へ昇格、60年4月教員養成の新開設、62年8月附属病院のオープンと組織も大きくなってきました。附属病院の開院前は教育が主で、臨床医学分野のスタッフとの接触が少なく、従って資料収集やサービス方法も病院図書室とは少し異なりましたが、病院が軌道に乗った最近では臨床に携わるスタッフの声が図書館にも強く反映されるようになり、一層病院図書室に近づいたと思えます。

最後に、設立15年、今後ますますこの会が躍動するようお祈りし、これまで以上のご指導をお願いしたいと思います。